



竹千代賞

あのひとと幽界

鞠戸 凡

甘ったるい春の匂いが、わたしの鼻の奥を突いた。途端に、わたしは嫌な気分になる。元より、わたしは春が大嫌いだった。

この甘い匂いも、そこはかとなく浮ついた街の雰囲気も、高潔で、純粹で、うつくしい冬が、俗にまみれた雰囲気、春に染め変えられてゆくのも、別れも出会いも、入学も卒業も、十二月が終わった瞬間から迎春だと喜ぶ人々も。ぜんぶがどうも気に入らない。子供のころの記憶はとても曖昧で不明瞭だが、きっとこれはわたしの生まれもった感情なのだろう。

——ただ、そんな春嫌いのわたしでさえ、参りました降伏しました春とはなんて素敵なものでしょう、と言わざるを得ないものが、ひとつだけ、たったひとつだけ存在する。

それが、桜という花だった。

桜の下には死体が埋まっている、と言ったのは誰だっただろう。桜を一目見てみれば、なるほどあれを言いたくなる気持ちも痛いほどわかるのだった。

わたしは昔から——、いや、先ほど言ったとおり子供のころの記憶など忘れてしまったけれど——、少なくとも物心ついたときからは、夏の蒸し暑い空気のかなかの蟬気楼だとか、冬の空に浮かぶピリオドのような星だとか、秋の地面を彩る色とりどりの落ち葉だとか、そんなものにどこことなく心を惹かれていた。

引き込まれてしまいそうだったのだ。全くわたしの住む世界とはちがひ、何もかもが新鮮な世界に、引き込まれてしまいそうだった。

夏の掴みどころのなさ、すこしひとをおかしくさせる。秋はいつも温かいはずなのに、どこか飄々としている。冬の高潔さは、言わなくてもわかるだろうが、心のどこかをくすぐる。そんなものに、目を奪われ、心を惹かれていた。ずっと、昔から。

先ほどわたしが春嫌いである理由を述べたが、実はあれ以外にも理由はある。

そのひとつが、わたしが高校のとき、わたしより先に卒業してしまった、なまえも覚えていない先輩のことである。卒業というのであれももちろん、春先のことだった。

彼女は浮世離れ、というよりも飄々としていて、いつでも何食わぬ顔をしていた。何食わぬ顔をしていて、裏で何をしてたのか、——あるいは何をされていたのか、などはわたしの知る由もなかった。もしかすると、あれは何食わぬ顔、ではなく平気な顔、だったのかもしれないし、はたまた平気そうな顔、だったのかもしれない。わたしはそれほど、彼女の内面、または奥をしらないに等しかった。

彼女はわたしよりもふたつ上の学年だったので、つまりは一年ほどしか話していないのである。あの一年が長かったのか短かったのか、それはいまでもわからないままだ。

ただ、彼女のあの飄々とした性格は、あの年代の少女少女を襲うアイデンティティの欲しさや承認欲求から来るものではなく、素面か、それとも、彼女の内にある何かしらの経験か、それとも、何かの研究結果から来るものであったと思う。一日でも彼女と付き合ってみればわかるけれど、本当にそんなふうに感じさせるひと



だった。それに彼女は恐らく、自分はこの学校というけったいな空間から近々はじき出されるのだろう、ということを理解していた、わたしなんかよりもずっとかしこい、あの空間ではごく稀な人間だった。結局わたしは周りの人間とおなじように、卒業するその日その瞬間までぼんやりと学校生活を送って、そこからはじき出された途端にそれを偲ぶように慈しんだのである。彼女はきつと、そんな無様で愚かなことは一度たりともしなかったのだろう。ただ、この時間が有限であることをきちんと理解し、それになんの執着も見せなかった。

彼女はそれでも、完璧にそのときその瞬間を生きていたわけでもなかった。

彼女がそれほどまでに完璧に生きていたのも、きつとあれは彼女なりの埋め合わせだったのだと思う。彼女は、いつもその学校という空間に、抵抗をしていた。あの何食わぬ顔で、そして死に物狂いで、抵抗をしていた。

勉強も出来て、顔立ちも良く、運動も出来ないわけではなかった彼女は、ごく普通に、なんの変哲もない学校生活を送れば、それなりのスクールカーストに存在を置けたはずであつたのに、それをしなかった。わたしは常時、それが心底不思議だったし、ときにはそれをひどく妬ましく思ったこともあった。

彼女は、力を持っていたけれど、それを振るうことなど一度もなかった。つまり、とても惜しいひとだったのである。いま考えればわかるが、それは彼女のなかで最も大きい——例えば授業を卒業できる程度にしかなかった、学校生活のほとんどを屋上で過ごすよりも大きい——反抗のひとつだった。

そんな彼女と出会ったときのことは、覚えていない。一年も喋っていたのに、わたしは彼女のなまえやら声やら、そんなものをほとんど覚えていないのだ。そんな彼女のことを思い出すというのは、わたしにとっては学校という空間の不思議さを思い出すのに等しい。

彼女と話していた思い出にあるのは、汚いわけでもないが特別綺麗でもない、平凡な校舎の屋上と、上へいくほど青みがかった空、そして、その青空を抱えるようにフェンスにもたれかかった、彼女の黒い後ろ頭だけである。

なまえも声も、顔さえ思い出せないというのに、わたしの脳のなかには、いつでも彼女が棲みついている。わたしはそれが不思議で仕方ないけれど、これも学校という奇妙な空間がもたらしたものの副産物、あるいは後遺症なのだと考えたら、充分納得がいく。

もうあれから何年と経っているのにも関わらず、永遠にも思えた、あの短い時間の思い出は、ほとんど彼女の後姿が占めていた。

「先輩、勉強できるじゃないですか。受けてくださいよ」

わたしは後ろから、その声をかけた。彼女の黒髪が、風にうすくたなびく。

「そうだね、気が向いたらね」

「そんなこと言って。今日も受けなかったんでしょう？ 午後は受けてくださいね」

「ふふ、なんでおまえがそんなこと言うの」

その笑い声に、どきりとした。彼女と話していると、その見透かすような笑い声に、わたしはときどき背筋を凍らせねばならないのだ。

「僕は、先輩と違って真面目に授業も受けてますし、家でだってそれなりに勉強もしますけど、僕は——」

——どうやったって、先輩のようににはなれない。

口に出してみても、わたしはどうとう惨めな気分になった。それから、彼女にひどく申し訳ない気持ちになった。勝手に羨まれ、妬まれ、彼女はどんな気分だろう。そう考えると、息が詰まる。わたしはどこまでも愚かで惨めだった。

「——駄目だよ」

突然、彼女が言った。いつものふざけた声よりも数トーン低くなった声だった。

「わたしのようになんか、なっちゃいけないんだよ」



「先輩……？」

すると、彼女が振り返った。わたしはぎょっとした。

彼女の顔は、見えるようで見えなかったのである。気を抜けばきっと何の違和感もないのだろうけれど、彼女の顔は、やはり見えなかった。

「あの、先輩……」

「おまえは」

彼女はわたしの声を遮った。

「おまえは、ただしいから、そのままいなくちゃいけないんだよ」

そこで、意識は遠のいた。

目を覚ますと、視界にはわたしの部屋の見慣れた天井が映る。

おかしい夢だ。そう思った。

そもそも、なまえも顔も覚えていない、ただの妙な先輩のことを忘れずにいるわたしが、変なのだろう。けれど、彼女は大人びて飄々として、大抵なことはぜんぶ対処できます、というふうな顔をしているくせに、どこか危うさがあった。

それは、詐欺に引っかけかりそうだとか、うっかり財布を落としそうだとか、寝不足で居眠り運転をしそうだとか、そういうものではなく、——どちらかといえば、自分で樹海に入っていってしまいそうな、夜の冷たく暗い海底でひとり迷子になっていそうな——、そんな危うさだった。

それでも、学生時代のわたしは、そんな彼女のことを大人びていて浮世離れた先輩だとは思っておらず、羨み、妬み、懂れていたのだと思うと、笑ってしまふ。

だってどうして、いま考えれば彼女が言い知れぬ、子供じみた闇を抱えていることなど一目瞭然であったのだ。

あれほど彼女の存在を忘れないでいながら、わたしは彼女との連絡手段をひとつも残していなかった。卒業の日、連絡先交換しておきましようか、と持ち掛けたら、いいよそんなの、と笑われたのだ。

理由を訊ねたが、彼女はそのとき言いよんどいて、だからわたしもすべてを覚えていたわけではない。どちらにせよ、きっと彼女もすべてを言ったわけではないだろう。

ただ、彼女に連絡手段の交換を断られた、ということがひどく理不尽に思えて、わたしは不満げに、別にいいじゃないですか連絡先くらい、といつまでも言っていた覚えがある。彼女はいつものように笑っていたけれど、それにすこしもなびかなかった。

あのときのわたしは、連絡手段を彼女とわたしの間に設けることが、わたしと彼女のためになると思っていた。けれど実際は恐らく、わたしのためにしかなかったのだと思う。

あのひとは、わたしの存在をあくまでも卒業までの存在だと、卒業のずっとまえから決め込んでいた。それはわたしだけ特別というわけではなく、彼女は、青春——というのにはあまりにも爽やかでうつくしくはないだろう——学校生活と、生活の線引きを、きっちりきっかりと引いていたのである。

当時のわたしは、もしかしたら、それを直感で感じていたのかもしれない。

わたしはいま、もしかすると当時も、彼女の存在について、残酷な神が魅せた幻のように考えているのだ。

——好きだったの？ あの前輩のこと。

卒業式の帰りに、当時仲の良かった友人に、そう訊ねられた。その問いに、わたしは上手く答えることができなかった。

でも、ここで答えないでおけば、それは肯定になる気がして、違う、と言っておけば、それは明確な否定になる気がして、わたしは、わからない、とだけ言うておいた。わたしにとってその問題は、手をつけないでおくべき問題だったのだ。



彼女に、好き嫌いなどつけたくなかった。つけても、無意味だと、思っていた。どうせ、いなくなるのだから。

いってしまう。わたしよりもすこし早く、けれど絶対的に追いつけない時間を、彼女は終わらせてしまう。他の誰もおなじように。それからわたしの眼では見えないのだろう世界へ旅立ってしまう。

鼻の奥が痛んだ。ちがう、好きだった、とわたしは友人に訂正した。

恋人とかじゃなくて、好きだったんだ、あのひとのことが。そう言えば、そう、と小さく友人は反応をした。――俺も結構好きだったよ、あの先輩のこと。

それからわたしたちはそれきり黙りこくって家路についた。

その日から先輩には一度も会っていない。きっと会おうと思っても会えない。この世界にいるのも危ういひとだったのだ。

けれどもわたしは、ふとしたときにあの青春の代名詞とも呼べる先輩を思い浮かべ、あの青みがかった空や、学校特有の閉鎖感に浸っている。それは確かなしあわせだった。